

社会学研究科 社会学専攻

《修士論文要旨》

原子価構造とサイコソーシャルサポートとの 関連についての実証的研究

高 貴 峻 司*

I. 問題と目的

ソーシャルサポートとは、1974年に Capan, G. と Cassel, J. が提案した概念である。ソーシャルサポートの定義は、多領域で用いられるがゆえに、様々であることから、筆者は、Cob(1976)の「個人がある情報を受け入れることによって、当該個人が世話され、愛され、尊重され、相互的な義務をもったネットワークメンバーであると信じさせるような情報。」というソーシャルサポートの定義を参考に、人と人との対人関係の中で、健康を維持・促進する働きであると設定した。Cohen&Syme(1985)は、ソーシャルサポートを、構造的側面と機能的側面という2つの側面があると考えている。本研究では、機能的側面を扱っている。House(1981)は、ソーシャルサポートの機能を、『道具的サポート』、『情動的サポート』、『情緒的サポート』、『評価的サポート』という4つの機能に分けている。本研究では、House(1981)のソーシャルサポートの機能を参考に、情緒的サポートと評価的サポートという心理的サポートについて考察した。

筆者は、久田・千田・箕口(1989)の「学生用ソーシャルサポート尺度」と、片受・大貫(2014)の「評価的サポート尺度」を吟味したところ、自他共に傷つかないように配慮したり、自他共に気持ちを察したりするという質問項目が不十分であると考え、『情緒サポート』と『評価サポート』、さらに自他共に傷つくことがないように配慮するサポートを加えて、それらの3つを含むサイコソーシャルサポートという新しい概念を用いた。筆者は、サイコソーシャルサポートを家族や友人や近所の人などに行なう心理的サポート、かつ個人や複数の人に行なう心理的サポートと考え、サイコソーシャルサポート質問紙を、サイコソーシャルサポートを行なう個人の心の働きを測定するための質問紙であると考えている。ここで述べる個人の心の働きには、サポートをしてあげるという「提供(志向)要因」と、サポートをしてほしいという「受容(欲求)要因」の2つの要因を設定した。サイコソーシャルサポートを提供することや、受容するには、他者(対象)の存在が不可欠である。それらの人と人のつながり方も様々であり、それに伴ってサイコソーシャルサポートの行ない方も様々であると考えられる。従って、筆者は、サイコソーシャルサポートを行なう中で、どのような人と人のつながり方が、サイコソーシャルサポートの実行に影響を及ぼすのかを検討することが必要であると考えた。そこで、本研究では、人と人のつながりを表した概念である Hafsi(2010)の原子価構造(VAT)を用いて、両者の関連について考察したいと考えた。本研究は、ソーシャルサポートを基にしたサイコソーシャルサポート質問紙を作成し、人と人とのつながりを捉えている原子価構造の性質を用いて、サイコソーシャルサポー

平成27年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

トと原子価構造との関連について検証する。さらに、サイコソーシャルサポートの提供と受容の関連についても検討することを目的とした。

II. 方法

本調査では、大学生147人を対象にサイコソーシャルサポート質問紙を実施し、サイコソーシャルサポート質問紙を作成した。そして、大学生111人を対象にサイコソーシャルサポートと原子化構造との関連を検証した。

III. 結果と考察

本調査のサイコソーシャルサポート質問紙（全26項目）の探索的因子分析を行ない、受容サイコソーシャルサポートと提供サイコソーシャルサポートの2因子を設定した。本調査の2因子の内的一貫性は、Cronbach α .861以上の値を得た。2因子の相関は、本調査で.32($p < .01$)と弱い相関を示した。さらに、サイコソーシャルサポートを高低群でグループ分けしたサイコソーシャルサポート分類の結果をみると、予備調査同様に、本調査でも、提供サイコソーシャルサポートが高く、受容サイコソーシャルサポートも高いというグループが最も多かった。しかしながら、半分以上が、他の3つのグループで、原子価論の安定した人と人とのつながりと、サポートの返報性の考えを支持しなかった。そして、サイコソーシャルサポート分類と、個人が他者に対して最も頻繁に示す原子価である活動的原子価との関連を調べたが、有意差が認められなかった。この要因として、VATの質問項目が影響していると考えられる。次に、各原子価を高群と低群に分け、各群の提供サイコソーシャルサポートと受容サイコソーシャルサポートの得点の差を比較したところ、『依存の原子価』の高群の方が『依存の原子価』の低群より、提供サイコソーシャルサポートが高いことを示した ($p < .05$)。また、『逃避の原子価』の低群の方が『逃避の原子価』の高群より、受容サイコソーシャルサポートが高いことを示した ($p < .10$)。この結果から、『依存の原子価』が高い人は、サイコソーシャルサポートを提供する傾向にあり、逃避の原子価が低い人は、サイコソーシャルサポートを受容する傾向にあると考えられる。人が他者にサポートを提供する時は、『依存の原子価』が作用していて、他者からサポートを受容する時は、『逃避の原子価』を抑制していると考えられた。

《修士論文要旨》

九分割統合絵画法による対人関係イメージについて

～イメージの分類とシャイネス度との関連について～

中 島 聡 美*

I. 問題と目的

青年期は友人関係をはじめとして様々な人と対人関係を形成していく時期であるが、1980年代から若者の「対人関係の希薄化」について指摘・問題がなされている。また、対人関係の形成、発展にシャイネスが影響を与えていることも示唆されている（栗林・相川，1995）。

シャイネスと対人関係の関連については、シャイな人は相手からポジティブに認知されているとは思っておらず、ネガティブに自分を捉えていることや、自分を抑えて相手に合わせて行動することが述べられている（葛西・松本，2010）。しかし、シャイな人の中には実際の社会的スキルは劣っておらず、むしろ個人がそう思い込んでいる人がいると菅原（1986）は指摘している。また、松田（2012）はコミュニケーション・スキルを高めることだけを考えるのではなく、自分のタイプを認識した上で、それにあった役割を取得すればいいと指摘している。そこで、自己理解を促す方法として描画テストに注目した。残華・石田（2010）は九分割統合絵画法で「他者イメージ」を描かせ、他者との関わり方などについて自己理解が促されることを報告した。このことから、九分割統合絵画法を使用して対人関係を振り返る方法として活かせないかと考えた。

本研究では、青年期を対象に「対人関係」をテーマとして九分割統合絵画法を実施し、対人関係の振り返りにどのような効果があるかを検討した。また、シャイネス尺度を実施し、九分割統合絵画法によってみられた対人関係の特徴とシャイネス度の関連について検討した。

II. 方法

20代～30代の学生または社会人37人（平均年齢23.4歳）を対象に調査した。個人、あるいは2～5名の集団で九分割統合絵画法を実施し、その後、半構造化面接を個別に行ない、描画後の質問、描画体験尺度（土田・田中・今野・丹・赤坂，2012）、早稲田シャイネス尺度（鈴木・山口・根建，1997）を記入してもらった。所要時間は40分～2時間（平均70分）であった。

III. 結果

九分割統合絵画法で得た描画を残華・石田（2010）を参考に5つの型に分け、さらに主観的（過去・現在・未来）、客観的（感情を伴わないもの・伴うもの）、について分類した。描画の型については、「⑤混合型」が14名、「②関わり型」が13名、「①種類羅列型」が8名、「③関わり結果型」が2名という順に多く、「④全般的イメージ型」が0名と該当者がいなかった。また、「主

平成27年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

観的」な絵を多く描いた人が21人、「客観的」が16人であった。描画では対人関係での関わりやツール、具体的な人物が多く表現されていた。

早稲田シャイネス尺度と描画体験尺度の相関を求めたところ、「発見促進因子」「表現促進因子」には相関がみられなかったが、「直面・抵抗因子」には中程度の正の相関がみられた。

描画後の質問では九分割統合絵画法をすることによって、自身を客観的に見ることができ、役に立ったという回答が半数以上いた。

IV. 考察

描画後の質問では九分割統合絵画法をすることによって、「自身を客観的に見ることができ、役に立った」という回答が多かった。さらに自身の対人関係を振り返ることで描き手が対人関係のどの部分について意識しているのかということも知ることができた。以上のことから心理臨床場面で描き手の対人関係における問題を扱っていく際にも役立つと考えられる。

一方ネガティブな絵を多く描く人はシャイネス度が高い傾向があるという仮説は検証されなかった。しかし、シャイネス度と「直面・抵抗因子」に相関があったことから、シャイネス度が高くなればなるほど描画から自身を見つめることに抵抗を感じたり、傷つく体験をすると考えられる。その要因として高柳・藤生(2014)によると、シャイな人ほど困った経験をしやすく、情動性を表現しやすいと述べられている。このことから、ネガティブな絵が現れたことにより、描き手のネガティブな出来事を思い出し、対処しきれなかったことや、描画に客観的な絵を多く描いたことにより、自身を表現することへの抵抗を表したのだと考えられる。このことから、シャイネス度の高い人に九分割統合絵画法を実施する際は、観念的にならないよう、描き手の心理的な負担にも考慮しておく必要がある。

表層的・抽象的な絵を描く人はシャイネス度が高いと予測していたが、表層的な絵を描いた人でも「発見促進因子」高群がいたことから、必ずしも自己理解が得られないというわけではないということが示された。

本研究では対象者が37名であったため、描画内容のカテゴリや型は暫定的なものとなり、現時点で一般的な特徴とみなすことは難しい。よって今後も対象者を増やすことで、これらのカテゴリや型の一般性を検証し、必要に応じて改正していく必要がある。また、描画内容が描き手にとって主観的か、客観的であるか、ポジティブであるかネガティブであるかについては、一般的な観点をもとにして筆者が判定したが、これに関しても、描き手自身が認識するところで判別していく必要があると思われる。

《修士論文要旨》

原子価とアタッチメント及び 暴力性自己評価の関連について

中 西 久 美 代*

I 問題と目的

10～20代の恋人間における暴力をデートDVという。内閣府が2009年に行ったデートDV調査（対象者1949人）では、女性13.6%、男性4.3%が恋人から何らかの暴力を受けたと回答している。また、横浜市の2009年のデートDV調査（対象者922人）では、女性38.8%、男性27.5%が何らかの暴力を受けたと回答している。このように、若者にとってデートDVは身近な問題となっている。そのため、若者への対策が必要であるとし、小畑（2012）は、自分もしくは実際相手がデートDVをするかどうか調査するものとして「デートDV可能性尺度」を作成している。デートDVは、人との繋がり方に問題があるために起こっていると考えられる。したがって、その人間関係の取り方に特徴があるのかどうかを検討する必要がある。

人との繋がりを捉える視点の一つとして、Hafsi は、原子価という概念で捉えている。元来、Bion（1961）は、化学において原子が結合するように、人間も原子価により他者と結合すると考え、その理論を発展させた Hafsi は原子価を依存、闘争、逃避、つがいの4つの型に分類した。Hafsi は、個人は全ての原子価が備わっているが、主要な原子価は1つでこれを活動的原子価と言ひ、他の3つを補助的原子価とした。

また、人との繋がりという点では、Bowlby がアタッチメントの重要性を強調し、人生早期に形成される養育者との温かく持続的な関係性が、生涯を通じてその人の精神的な健康を支えると考えた。このことは、成人後の人との繋がり方にも大きく影響するものと考えられる。

そこで、デートDVをする者の、人との繋がりにもつ傾向について、原子価とアタッチメントの側面から検討しようと考えた。原子価で示されたタイプとアタッチメントで示されたタイプと、小畑の「デートDV可能性尺度」を用いて示されたデートDVをするかどうかの暴力性自己評価の間に関連があるかどうかを調べることを、本研究の目的とした。

II 方法

1. 調査時期と対象

2015年7月～9月、2つの私立大学で、自身の原子価を測定してある学生を調査対象とした。女性82名、男性39名であった。

2. 調査内容

①原子価 入学後、心理学の授業時に原子価の測定用紙を配布し、記入後回収した。測定は、Hafsi により行われた。

平成27年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

- ②日本語版 Relation Attachment Test：成人のアタッチメントを測定する尺度。結果が「他者中心的」、「共在的」、「寄生的」、「対立的」の4つのアタッチメント・スタイルの因子に分けられる。
- ③デートDV 可能性尺度 小畑 (2012)：DV行為を行いそうかどうかの暴力性の自己評価尺度として用いた。「間接的暴力」、「破壊的暴力」、「直接的暴力」、「一方的性」の4つの因子に分けられる。

Ⅲ 結果

・原子価と暴力性自己評価

両者の関係を検討するため、対応なしの一元配置分散分析を行った。その後多重比較を行った。原子価と暴力性自己評価の間にはいずれも有意差は認められなかった。

・アタッチメント・スタイルと暴力性自己評価

ピアソンの積率相関係数を用いて有意性の検定を行った。「他者中心的アタッチメント・スタイル」と「破壊的嫉妬」に1%水準で有意差が見られ、相関係数は $r = .397$ であった。「寄生的アタッチメント・スタイル」と「破壊的嫉妬」に1%水準で有意差が見られ、相関係数は $r = .245$ であった。「対立的アタッチメント・スタイル」と「間接的暴力」に1%水準で有意差が見られ、相関係数は $r = .265$ であった。「対立的アタッチメント・スタイル」と「破壊的嫉妬」に5%水準で有意差が見られ、相関係数は $r = .199$ であった。

Ⅳ 考察

原子価と暴力性自己評価には、すべて関係性が認められなかった。原子価の型のうち「闘争」が最も自己主張が強く攻撃性がある原子価だが、理性の働きと自身の持っている補助的原子価の働きにより、自己の暴力性が抑えられるためと思われる。他の3つの型は攻撃性が弱いこともあり、同様のことが言えると思われる。

アタッチメント・スタイルでは、「他者中心的アタッチメント・スタイル」と「破壊的嫉妬」に弱い相関がみられた。自分よりも相手を優先することにより、相手に対する愛情が過度な支配や独占欲につながりやすいと思われる。「寄生的アタッチメント・スタイル」と「破壊的嫉妬」の弱い相関は、相手に寄りかかっていく傾向が相手に対する過度の独占欲や支配につながるものと思われる。「対立的アタッチメント・スタイル」と「間接的暴力」の弱い相関は、相手と対立的な関係を持つことから暴力を振るう関係になりやすいと思われる。「対立的アタッチメント・スタイル」と「破壊的嫉妬」の弱い相関は対立的な関係が疑心暗鬼を生むと思われる。しかし、これらは弱い相関でありアタッチメント・スタイルと暴力性自己評価に大きく関係することはないと思われる。

では、デートDVの起こる背景にはどのようなことが考えられるだろうか。今回の調査ではなされなかった親の養育態度や親の価値観などが関係すると考えられ、多様な要因について今後検討が必要だと思われる。

《修士論文要旨》

フリースクールに通所する中学生および 高校生の居場所感と成長感に関する一研究

藤 村 奈 未*

I. はじめに

近年、不登校児童生徒の増加に伴い、いわゆる「居場所」を定量する支援も増え、「居場所」という言葉がよく聞かれるようになった。不登校経験者や大学生の調査は多くあるが、不登校の渦中にある児童生徒の体験の内容を調査した研究は少ない。このことから、現在居場所を求めている人々の居場所に対する考えが十分明らかにされていないのではないかと考える。

本研究では、筆者が関わっているQフリースクール（以下Qスクール）でインタビュー調査を行い、現在居場所を利用中の生徒達の体験を「居場所感」、「成長感」の観点から調査をし、居場所を求めている人々に対しての支援方法を考察することを目的とする。

1. 居場所感とは

居場所感については、「心理的居場所感」と定義し「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分が受容される場があるという感情」（則定、2008）と定義する

2. 成長感とは

成長感については、宅（2010）の「自己成長感：青年自身による自らの心理的な成長の手ごたえや、主観的な成長」と定義する。

II. 方法

1. 調査対象者

保護者、本人からの調査の許可を得たQスクールに通所する中高生（以下スクール生）8名中7名（男子：5名、女子：2名）が対象となった。平均年齢：15.14歳。通所平均期間：22.14ヶ月。知った経路は、保護者：6名、ホームページ：1名、未記入：1名（延べ人数）。通所動機は、保護者：4名、その他：1名、未記入：2名（データは2015年7月現在）である。

各スクール生に対して無作為にスタッフ2名を付けた。協力者は2年以上Qスクールで勤務しているスタッフ7名である。

スクール生の保護者7名にも調査を依頼した。

2. 調査方法

（1）スクール生に対する調査

a. 自由記述調査：スクール生のプロフィールや成長感やフリースクールでの体験、則定（2008）の研究を参考にフリースクール、学校、家の居場所イメージについて回答を求めた。

平成27年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

b. 質問紙調査：①石本（2007）の居場所感尺度と、②石毛・武藤（2005）の成長感尺度を用いた。①はフリースクールに初めて来た当初と現在について問い、3件法で実施した。②はフリースクールに来てから成長したことについて問い、2件法で実施した。

c. インタビュー調査：事前調査で得られた回答をもとに実施。半構造化面接で実施。事前調査の感想を求め、その後、①来たときの状況、②印象に残っていること、③自分が成長したこと、④居場所について、⑤他機関への通院・相談歴、調査終了後にインタビューの感想を求めた。

（2）スタッフに対する調査

a. 自由記述調査：該当スクール生に対するプロフィールや成長したことや印象に残っていることについて回答を求めた。

b. 質問紙調査：スクール生と同様の尺度を使用。しかし、①の居場所感尺度については5件法で実施した。一方、②の成長感尺度については、4件法で実施した。

（3）保護者に対する調査

質問内容は自分の子どもが①Qスクールに入所してから成長したこと、②入所してから印象に残っていること、③その他気付いたことを自由記述で回答を求めた。

3. 分析方法

アンケート調査についてはIBM SPSS Statistic Version21を使用。インタビュー調査についてはSteps for Coding and Theorization（大谷，2007）を使用。

Ⅲ. 結果

スクール生の「成長感」に関する理論は、《社会的スキル》、《コミュニケーションスキル》、《他者受容》など、他者関係の中で生まれるものである。「居場所感」は《被受容感》、《安心感》など、「心理的居場所感」に関する項目と、「楽しむ」感覚が含まれているとした。一方で、《疑問感》、《本来感が出せない》など不満もある。居場所を使い分けしているスクール生も存在する。「印象に残っていること」では、居場所感に関することやポジティブな出来事が挙げられる一方で、ネガティブな感情も挙げられた。

スタッフ・保護者から見た「成長感」も、《社会的スキル》、《コミュニケーションスキル》、《他者受容》など、他者関係の中で生まれるものである。「印象に残っていること」は、日常のこと、感情面のことが挙げられた。保護者からは、親から見た安心感もあると思われる。

Ⅳ. 考察

本研究の結果から、居場所では、子どもたちのありのままを受け入れ、本来感を育てることが重要となる。自由に自分を表現できる場を継続して提供し、子どもたちが楽しいと思える場所の提供も必要になってくると思われる。自由に振る舞うことが重視される一方、居場所には様々な他者が存在する。人間関係の構築も行われ、社会的スキルを学ぶ場になることも考えられる。体験を他者と共有し、認められることによって体験に対する理解が深まり、成長に繋がるのではないか。そして、日常的にスクール生にフィードバックを行うことで、自分を見直す機会となり、より自分が成長したと実感し、自分に自信を付けることも援助の中に必要となってくるだろう。

《修士論文要旨》

被養育態度と養護性および 向社会的行動の関連について

～大学生の調査により～

横 田 真 央*

I. はじめに

文部科学省は「現代の日本の若者・子ども達は、他者への思いやりの心や、生命尊重の力の低下を指摘されており、低下しているのは大人たちの問題でもある」と述べている。

子どもに関する研究でも、親の養育態度との関係性が指摘されてきた。たとえば、「短気、心配性、取り乱しやすさ、感情不安定などの性格傾向は、養護的態度の低さや過保護的態度と相関が強い」と小川（1994）は指摘しており、「幼少期における親の養育行動は、子の攻撃性に強い影響を与える」と笠井ら（2009）は述べている。

筆者は、菊池（2014）が向社会的行動を「思いやり行動」と言っていることから、文部科学省（2009）が指摘している「思いやり」は向社会的行動に該当するものと考えた。また、養護性を「生命を慈しみ育む心」と小嶋（1989）が述べていることから、生命尊重には養護性が不可欠であると考えた。

先ほど述べたとおり、「思いやり」を「向社会的行動」と考え、「生命尊重」を「養護性」と考えた上で、文部科学省（2009）が指摘しているとおり、現代の若者のそれらが低下していることに、大人、特に親がどのように関係しているかを調べたいと考えた。菊池（2014）、棚澤（2009）らの研究では、「両親の養育態度」が「養護性」と「向社会的行動」に影響を及ぼしていると述べている。そこで本研究では、両親の養育態度と向社会的行動、養護性との関連について実証的に検討することを目的とした。

II. 方法

調査対象者は、私立大学の学生男女合わせて280人である。調査は、2015年9月から10月に実施した。調査には、性別、年齢などの基本的属性に関する質問のほか、①「養護性尺度」24項目、②「子どもから見た親の養育態度の尺度」24項目、③「向社会的行動の尺度（大学生版）」20項目を使用した。

III. 結果

① 養護性と子どもから見た両親の養育態度の関連

母親の「養護因子」と、養護性の「共感性」 $r = -.258(p<.01)$ 、「技能」 $r = -.212(p<.01)$ 、
平成27年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

「準備性」 $r = -.212(p < .01)$ 、「非受容性」 $r = -.202(p < .01)$ は、負の相関があるということがわかった。また、母親の「過保護因子」と、「非受容性」 $r = .146(p < .05)$ に正の相関があるということが示された。さらに、母親の「自立因子」と、「共感性」 $r = .120(p < .05)$ 「非受容性」 $r = .147(p < .05)$ は、正の相関があるということが示された。次に、父親の「養護因子」と、養護性の「共感性」 $r = -.189(p < .01)$ 、「技能」 $r = -.201(p < .01)$ 、「準備性」 $r = -.256(p < .01)$ 、「非受容性」 $r = -.235(p < .05)$ は負の相関があるということが示された。また、父親の「過保護因子」と、「共感性」 $r = .178(p < .01)$ 、「技能」 $r = .120(p < .05)$ 、「準備性」 $r = .209(p < .01)$ 、「非受容性」 $r = .260(p < .01)$ は、正の相関があるということがわかった。

② 向社会的行動と子どもから見た両親の養育態度の関連

母親の「養護因子」と「向社会的行動」 $r = -.200(p < .01)$ には、負の相関があるということが示された。次に、父親の「過保護因子」と「向社会的行動」 $r = -.346(p < .01)$ には負の相関があるということが示された。さらに、父親の「自立因子」と「向社会的行動」 $r = .486(p < .01)$ には正の相関があるということがわかった。

③ 養護性と向社会的行動の関連

「向社会的行動」と、養護性の「共感性」 $r = .342(p < .01)$ 「技能」 $r = .440(p < .01)$ 「準備性」 $r = .377(p < .01)$ 「非受容性」 $r = .193(p < .01)$ には、正の相関があるということが示された。

④ 養護性と向社会的行動の性差

t 検定をおこなった結果「養護性」と「向社会的行動」は、男女で有意な差が見られた。このことから、男性より女性の方が「養護性」と「向社会的行動」の得点が高いことがわかった。

IV. 考察

今回の結果から、父親と母親の「養護因子」と養護性の「共感性」「技能」「準備性」「非受容性」との間に負の相関がみられ、父親と母親に養護的な関わり方をされなかった方が、子どもの養護性が育つことが考えられた。父親の「過保護因子」と養護性の「共感性」「技能」「準備性」「非受容性」との間には、正の相関がみられたことから、父親に過保護的な関わり方をされた方が子どもの養護性が育つことが考えられた。

そして、母親の「養護因子」と「向社会的行動」との間には負の相関がみられ、父親の「自立因子」と「向社会的行動」との間に正の相関がみられたことから、父親と母親の関わり方によって子どもに影響するものに違いがあることが考えられた。

これらの結果から、両親の養育態度と養護性および向社会的行動には関連があることが示唆された。